

〔カンショ〕

1. 作付の概況

2006年度の全国の作付面積は前年産並みの40,800haで、九州は19,000ha（前年対比3%増）であった。これは、食用カンショの主産地である茨城県、千葉県などにおいて、価格の低迷や農家の高齢化による労働力不足等により減少したものの、宮崎県、鹿児島県で焼酎用の需要が増加したことによる。収穫量は98万8,900t（同6%減）、10a当たり収量は2,420kgで、前年を160kg下回った。全国的に植付期以降から7月下旬にかけての日照不足により茎葉の生育が抑制されたことや、九州南部では、いもの肥大期にも日照不足となったことから肥大が抑制されたためである。

2. 作柄の概況

九州4県の10a当たり収量は、生育期の日照不足等の影響を受け、前年対比で5～13%減となった。九州全体の収穫量は508,360tとなった。

鹿児島県では、植付始めの4月中～下旬が低温で経過し、さらに5月上旬の少雨により、活着がやや抑制されたものの、挿苗最盛期以降は天候に恵まれ活着は良好であった。5月中旬から7月上旬にかけて日照不足により地上部の生育はやや抑制されたものの、その後は高温・多照の天候に恵まれ、前年産並みの生育となった。着いも数は前年産に比べやや多く確保されたが、いもの肥大は9月の日照不足と一部地域において台風害による茎葉の損傷や潮風害が発生したことから、前年産に比べやや不良となった。病虫害被害については、ナカジロシタバやハスモンヨトウによる葉の食害やつる割れ病の発生は前年産に比べやや多かった。以上のことから、10a当たり収量は2,930kgで、前年産を170kg（5%）下回った。また、収穫量は40万1,400tで、前年に比べて1万7,100t（4%）減少した。

宮崎県では植付期の5月上旬から生育期の7月中旬にかけて、日照時間が平年より少なく推移したため、苗の活着は平年並みであったものの、地上部の生育は遅れ気味で、8月収穫の早掘栽培では収量およびでん粉歩留が平年に比べて低くなった。8月から9月中旬にかけても日照時間は少なかったが、9月下旬以降は高温・多照で経過したことから、地上部の生育は概ね平年並みで、条件によってはやや過繁茂の圃場も見られた。10月以降の標準掘りおよび遅掘りについては、いもの肥大は平年並みかやや劣り、最終的には10a当たり収量は2,450kgで前年産を13%下回った。しかし、収穫量は作付面積の増加により、前年産に比べて1,800t（3%）増え、7万0,300tとなった。

（九州沖縄農業研究センターサツマイモ育種研究チーム 吉永 優）

2006年度カンショ作付面積と収穫量

区分	作付面積	10a 当たり 収量	収穫量	前年産との比較					
				作付面積		10a当たり 収量		収穫量	
				対差	対比	対比	対差	対比	
(ha)	(kg)	(t)	(ha)	(%)	(%)	(t)	(%)		
全国	40,800	2,420	988,900	0	100	94	△ 64,100	94	
九州	19,000	2,318	508,360	600	103				
福岡	194			△ 16	92				
佐賀	118			△ 3	98				
長崎	556	1,720	9,560	△ 28	95	89	△ 1,740	85	
熊本	1,250	2,170	27,100	0	100	93	△ 2,200	92	
大分	307			1	100				
宮崎	2,870	2,450	70,300	440	118	87	1,800	103	
鹿児島	13,700	2,930	401,400	200	101	95	△ 17,100	96	
沖縄	282			7	103				

注)平成18年産かんしょの収穫量(農林水産省統計部 平成18年12月26日公表)に基づいて作成
九州の10a当たり収量、収穫量は福岡、佐賀、大分を除くデータ